

---

# かぐや姫は、もういない

やしろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かぐや姫は、もついない

### 【ZPDF】

Z0875W

### 【作者名】

やしひ

### 【あらすじ】

自称・月から来た子と、その子にいなくなつてほしくない子の、真夜中のおしゃべり。

「私は月の人間なの。じき迎えが来るから、慣れ合つのは時間の無  
駄」

眉一つ動かさずに、はづきは言つ。

「だから、放つておいてちょうどいい」

取りつく島もないこのいつもの言いやうに、「おまえはかぐや姫か」と突つこむことはせずに、私は聞き流し、返事の代わりに今しがた口から離したばかりの缶コーヒーを差し出す。

「・・・何、これ」

「はづきも飲んでみなよ、これ。新製品だから、試しに買ってみた  
んだ」

私と缶コーヒーとの間を、はづきの視線が往復する。その顔は強い不信感と、ほんの少しの困惑に歪んでいる。こんな表情でもきれいなんだから、美人は得だよなあ、まったく。

なかなか受け取ろうとしないはづきからあえて目を逸らし、私は軽い調子で言う。

「知らない? コーヒーって豆から出来てるから、そんじょそこらの得体の知らないジュースよりずっと純度が高いの。いわば、質がいいってわけ。飲んで味を知つておいた方が、月に帰つたときの土産話になると思うけど」

はづきは所在なさげに宙に浮かせた手を少しだけ震わせたあとに、勢いをつけて私から缶をひつたくる。

「言つておいてあげるわ。地球には、こんなに不味い飲み物が流通  
してゐる」

ぶつきらぼうにそれだけ言つて、はづきはコーヒーを少しだけ口に含む。途端に、今度は苦々しい表情に変わる。クールぶつてはいるけど、はづきは表情にすべて出てしまつてゐる。本人は気付いてないんだらうけど。

「はづきには、ちょっと苦かったかな？」

私の口調にからかいの色を感じ取ったのか、はづきの険が急に鋭くなる。

「はい、捨てない捨てない

缶を振り上げるはづきの手を押さえ、怒っているのがバカバカしく思えるような、のんびりした調子を心がけて、諭す。

「まだ中身残ってるでしょ。もつたいないし、第一ポイ捨てをするなんて、モラルを疑われるよ。見てんでしょう、月が」

はづきが私を睨む目はそれはすさまじいものだつたけど、とりあえず缶はその手に握られたままだ。

よかつた。あれなら、ちょっとは暖を取れるだらう。

私ははづきに気取られないように、小さく息をつく。夜の冷氣は律義に私の安堵のあとを白く残す。

真冬の夜は冷える。ここが廃ビルの屋上で、月にいくらか近からうと、はづきを暖めてくれるわけではないのだ。

まだ中身のたっぷりと残つたあの缶が、少しばづきを暖めてくれるだらう。

冷たい月の代わりに。

太陽になれない私の代わりに。

はづきと知り合つたのは中学生になつたばかりのことだつたから3年ほど前のことだつたけど、私はそのずっと前からはづきのことを知つていた。すぐ近所に住んでいたからだ。

小学生の頃はクラスが別々だつたから接点はなかつたけど、はづきは二つの意味で目立つ存在だつた。

すなわち、「美人」であり「電波女」という抜きん出て疎まれる特徴のせいだつた。このどちらか一つだけしかはづきが持つていなかつたら、あそこまではづきが嫌われることはなかつただらうな、と

私は思う。

クラスが違っていてもそれとわかるほど、はづきは一人ぼっちだった。

はづきのクラスはいつもホームルームが長くて、必ずと言つていいほど、議題は「榎本はづきさんへのいじめをやめましょう」というもので、担任の先生はいつも声を張り上げて「人の持ち物を隠したり、まして捨てるなんて最低の行為だ」とか「自分が無視されたらどんな気持ちになるのか考えてみなさい」とか、「いかにも」な内容の説教を毎回ダダ漏れにしていた。先生はそんなつもりはなかつたのかも知れないけど、あれじゃあ「榎本はづきは物を隠されたり無視されたりしている、そういう子なんですよ」と宣伝しているようなものだ。

いつも一人で家路に着くはづきの顔は「私は平氣です」とでも言いたげにすましたもので、それでいて靴の片方がなかつたり、スカートの端が泥で汚れていたりした。

1回だけ、クラスの垣根を越えて学年ホームルームというのが開かれたことがある。

滅多に使われないスクリーンを先生たちが用意して、ずいぶん古いホームドラマを見させられた。

親がいない「かわいそうな」女の子が、それでも強く生きていく「かわいそうな」話だった。

「君たちの中には、親御さんがいない子もいます。それでも、君たちと何も変わることのない人間です。差別をされるいわれも、意地悪をされるいわれもありません。それを、忘れないでください」先生の締めくくりのこの一言に、このホームルームははづきのために開かれたのだと、なんとなくわかった。

そうか、あの子には親がいなかつたのか。

集められた子の中には泣いている子もいた。ホームドラマに感動したのか、先生の言葉に自分を恥じたのか、それはわからない。

ホームルームは妙にしんみりとしたものになつて、その場にいた誰

もが「かわいそうな」子を「憐れむ」雰囲気になっていた。

ただ一人、唇を噛みしめて震えるはづきだけを除いて。

私は、はづきが声もなくひたすらに「かわいそうな」子のレッテルから自分を保とうとしている姿を見て、思つたのだ。

人に「かわいそう」と思われて初めて、人はかわいそうな人間になるのかかもしれない、と。

「今夜は月がきれーだねー」

私の能天気な言葉に、はづきは一言も返さない。でも、いつものことなので特に気にしない。

「かぐや姫が月に帰った日も、こんなきれーな満月だつたのかもね」  
もつとも、かぐや姫ははづきと違つて、迎えを待つために寒空の下に一人で待ちぼうけをさせられる待遇ではなかつたんだろうけど。自称・かぐや姫のはづきは、私に半ば押しつけられた缶を両手で大事に包んでいる。やっぱり、寒かつたんだろう。無理にでも押しつけてよかつた。

私たちが登れるなかで一番高い廃ビルに登つて、地上よりいくらか月に近いとはいえ、やっぱり月は地上にいる人たちに見せるのと同じ、手の届かない存在として静かに佇んでいる。

15歳の誕生日の今夜、はづきの言い分では月からの迎えが来るらしい。

去年も、おととしもそう言つていた。誕生日になれば、月から迎えが来るので。

私はそのたびに、今日のよつに頼まれもしないのに着いてきて、来ない迎えを一緒に待つた。

「かぐや姫の求婚者は5人だけだつたけど、はづきはもつとモテたよね。軽く倍はいつてたんじやない?中学に入つてからのことしか、私は知らないけど」

「・・・私は、かぐや姫じゃない」

はづきが口を開く。冬の澄んだ混じりけのない空気は、苛立ちに紛れたはづきの不安を正確に振動させる。

「かぐや姫は、あいつは罰を受けてここに置き去りにされたくせに、月に行きたくないと言つた。こんな、ふざけた世界に。私は、あいつとは違う。一刻も早く、月に帰りたい。ここは私の居場所じゃない」

罰を受けた、か。

たしかに、竹取物語にはそんな描写があった。

かぐや姫は月で何か罪を犯し、その罰としてこの地球に送り込まれた。反省してこいといつたところだろう。

でも、彼女は「月に帰らなくてはならない」と育ての親であるじいさんたちに告白したとき、泣いた。「帰りたくない」と言つた。「あんなに帰りたかつた月だつたはずなのに、あなた方と離れたくないくなつてしまつたから」と。

たしかに、はづきはかぐや姫じゃない。

傍らで缶を握りしめるはづきは、小さな缶にすがつてこるよう見えて切なくなつた。

あんたをここに引きとめる理由は一つもなく、いつまで経つても来ない迎えを、震えながら待つている。

「どうして月に行きたいの？」

いつもならあつさり無視する私の問いかけに、はづきは珍しく反応する。答えを探している素振りが窺えた。

「月に行つたらさ、たぶんもう戻つて来れないよ。かぐや姫もそうだつたじゃん。今は科学も進歩してるし、地球から月に行ける日もそんなに遠くないんだからさ、なにも今急いで行くことないじゃない。かぐや姫みたいに牛車に乗つて、なんて時代遅れの帰省よりも、銀色に光るスタイリッシュな宇宙船で行つた方が、月にいるはづきの身内も驚くと思うけどなあ。そりや、ちょっと時間はかかるかもしないけどさ、月の住民は寿命が長いんでしょう? 何の問題もない

じゃない

無駄だということは、わかっている。

それでも、私のバカげた理屈に少しでも呆れてほしかった。月をどうこう言つことから、少しでも離れてほしかった。

そんなわざかな期待を込めて言つただけに、はづきの言葉に私は不覚にもダメージを受けてしまった。

「ここにいても、私は幸せになれないから

はづきの口の端には、笑みさえ浮かんでいた。

「かぐや姫がこの世界に送り込まれたのはね、月の国のありがたみを知るためなのよ。こんな、理不尽でむなしい世界で得られるものなんて、『醜い』という概念だけ。それを知るため、ただそれだけのために、月はここに人を送るの」

月に行きさえすれば、そこに私の求めるすべてがあつて、ここには何もない。

はづきの中に根付いた、その根拠のない確信に、私は泣きたくなつた。

「私も、着いて行こうかな

言葉と一緒に出た息が、やけに濃い白になつた。

ちゃんと、冗談半分に聞こえてるだろつか？はづきに私の気持ちを悟られたくない。

あんたが「かわいそうな」人間だなんて思わない。私だけは絶対、思つたりしないって決めてるから。

私が思つたら、認めてしまつたら、はづきは本当に居場所をなくしてしまつ。自惚れであつても、私だけははづきをわかつたフリをしたくない。

「いじめられっこ」でも「幼い孤児」でも、まして「かわいそう」なんて言葉ではづきを縛つて、見失つてしまいたくないの。

「最後に聞いておいてあげる

はづきは1回言葉を切つてから、少しだけ強い口調で言つ。

「あんたが私に付きまとつのは、同情？」

「違ひよ」

「じゃあ、何」

「今さらそんなこと聞くんだ」

「・・・何を笑ってるの」

「だって、今さら、そんな簡単なこと、聞かれるとは思わなかつたから、おかしくって」

はづきが黙つてしまつたあとでも、私は体を震わせて笑つた。本当におかしかつたのだ。自分がどこにいるのかもわかつていないので一生懸命になつて地図を見て道を探しているみたいに、根本的な情報を見落としているのに氣付かないようなマヌケさが、おかしかつた。

「決まつてゐるじゃない。はづきが好きだからだよ」

ねえ、はづき。私じや、月の代わりにはなれないかな。居場所になることなんて出来ないのかな。

たしかに、この世界にはあんたの言つとおり、理不尽でもなしいことばかりなのかもしれない。

私が知つてゐるあんたは、ただ人と違つてゐてだけで一人ぼっちで、でもちゃんとへこたれずに生きてる。それつて、誇れるけどじやん。私はあんたのそういう曲がらないところがいいと思う。

何があつても絶対に傷つくことがない世界があんたのいう月だとうのなら、たぶんそんな世界はどこを探しても見つからない。

ここからなら光つて見える月だつて、実際は砂しかない寒い星だ。うさぎもいない。かぐや姫は死んだ。

「まったく、月の人間を引きとめておく手段つて、ないもんかね。かぐや姫は育ての親が泣いて縋つても、迎えが来た途端に何もかも忘れて帰つちゃうし。無責任だよ、本当に」

かぐや姫は、月に帰る寸前に「育ててくれた、せめてもの恩返し」と、じいさんたちのために不老不死の薬を残した。

「おまえのいゝ世界で長く生きていたつて仕方がない」じいさんたちはそう言って薬を燃やしてしまつたことを、かぐや姫は知つて

いるんだろうか。

自分が周りに与えた影響を知らずに行つてしまつなんて。

はづき、あんたもかぐや姫と一緒に、身の程知らずの大バカ娘だよ。

「・・・私のことが好きなら、どうしてあんたは泣いてんの」

「え？」

「好きなら、笑いなさいよ、いつもみたいに。地球人は、好きな人間の前では笑う生き物なんでしょ？」

はづきが目の前に来て初めて、自分の視界がやけに滲んでいることに気付いた。本当に、泣いてる。

「悲しいの？私のことが、嫌いなの？」

「悲しい、のかな。だって、あんたつてば、私の気も知らないで、自分勝手なことばかり言うんだもん」

「自分勝手とはなによ。あんたには関係ないでしょ」

「ほら、そういうところ。はづきはバカだよ。自分のことを考へるのは自分だけだと思つてる」

泣いていると自覚した途端に次から次へと涙はあふれてきて、声を出して本格的に、私は泣きだしてしまつた。

はづきはただおろおろと手を彷徨わせ、缶コーヒーを傍らに置いてから、私の手ににぎつた。とても温かくて、だから私はもっと泣いた。

どれくらいそうしていたかはわからない。

涙を流しつくし、呼吸もようやく落ち着いてきた頃に、はづきはぼそぼそと小さな声で、さつきと同じことを聞いてきた。

「私のことが、嫌いなの？」

握られた手を温かいと感じることはなくなつた。

たぶん、私の冷たい手を温めていたせいで、温度が均されてしまつたんだねつ。

私ははづきの体温は、今は同じだ。

「やっぱりはづき、あんたはバカだよ。もう少しここで勉強しないと、月はあんたを認めてくれないよ」

いつの間にか明るくなってきた空に、月は頼りない白色に変えられてしまっている。

もっと薄くなれ。出来ることなら、消えてなくなってしまえ。

「好きな人間の前でなきや、泣けないやつもいるの。地球人の思考回路は、あんたが思つてるほど単純じやないんだから。わかるのにはきつと、時間がかかるだらうけど」

少しづつ顔を出してきた太陽の光のうちの一筋が、はづきの顔を照らす。月元から頬へと縦に一本筋が出来ていて、光を受けてきらきらと輝く。

泣いてたの？

待ちぼうけをくらつたことがはつきつしたのだから、予想通りではある。

「月からのお迎え、今年もお預けだね」

努めて明るい声を出す。はづきで感情を引きずり込むのは酷だと思つたからだ。

でも、予想していた反応とは違つていた。

「いいわよ、べつに。泣き虫な誰かさんのために、もう少しだけいてやれつてことなんじょ、きつと」

「迷惑？」

「わけのわからない理由で泣かれるのはね」

はづきはそう言って、少しだけ、勘違いだつたのかも知れないと思つうほどの短い間だけ、笑つた。

それはこっちのセリフだよ、とこつ言葉は呑みこんだ。

朝日はすべてを平等に照らしていく。

私とはづきの涙のあとは、少しだけ光り、また消えていくだらう。何度も流れても、また必ず乾かすために昇つて来てくれる。

「はづき、地球の日の出はきれーだね」

薄くなつていく月が登る空を見上げたはづきは、小さく頷いた。

今は、それで充分だ。



(後書き)

竹取物語では、かぐや姫は月の人間が持つてきた薬を飲んだ途端に「人間」であつたときの心をなくし、何の抵抗もなく月に昇つて行つたとされています。なんか、それはけっこつ悲しい話だよなあと思いながら書きました。読んでくださいありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0875w/>

---

かぐや姫は、もういない

2011年10月8日03時09分発行